

はじめに

この本は、2008年9月15日に慶應義塾大学三田キャンパス西校舎ホールで開催されたシンポジウム「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を超えて、および、同年12月21日に慶應義塾大学日吉キャンパス第4校舎J14教室で開催された言語・英語教育講演会「言語リテラシー教育のポリティクス」を基にしたものです。両日の登壇者や参加者による論考8編を収めてあります。加えて、この4年間、文部科学省内部にあって英語教育政策に大きな影響を与えた菅正隆さん（元文部科学省教科調査官、現大阪樟蔭女子大学教授）による、教育行政の立場からの「作品」をも収めることができました。さらに、日頃から英語教育の諸問題に鋭い分析で迫っている柳瀬陽介さんの論考、実践の場から英語教育に対する興味深い実践や提言を行っている齋藤菊枝さんと末岡敏明さんの実践報告と論考を寄稿していただきました。また、福田浩子さんによる、複言語主義における言語意識教育に関する興味深い論考を著者と原論文掲載誌の了解を得て、転載させていただきました。

巻末に付した資料も充実しています。『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」と同「行動計画」に関する資料、「戦略構想」関連年表、CEFRについての資料、そして、9月15日のシンポジウムをきっかけとして作成し、教育再生懇談会に提出した「英語教育のあり方に関する要望書」を掲載しています。

シンポジウムと講演会が開催された2008年は、2002年に策定された『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」とそれに基づく「行動計画」がその目標の達成期限と定めた年にあたります。その「戦略構想」が学校英語教育に与えている影響はきわめて多大了。にもかかわらず、「戦略構想」や「行動計画」にきちんと目を通し、それらに対する自らの姿勢を明確にしている人の数はさほど多くありません。このことは英語教育関係者についても例外とは言えません。

しかし、「戦略構想」に反映された英語教育観は、「現代社会においてその重要度が一段と増している英語の運用能力を身につけた人材を育成すること」にこそ、学校英語教育の目的である」というものであり、それ自体、根本的な議論が必要です。また、「戦略構想」に盛り込まれている「数値」目標の設定という考えも、大いに検討の余地があります。

それにもかかわらず、「戦略構想」を分析し、きちんと評価した論考はほとんど見当たりません。むしろ、「戦略構想」の一部に組み込まれている小学校英語をどのように実践するかとか、大学英語教育においてTOEICのスコアによる数値目標をどのように達成するかといったことだけが話題になることが多いのです。こうしたトップダウンの方針を丸呑みする状況は何となくはなりません。

小学校英語を例にとってみましょう。小学校英語はすでに既定路線だから、もはや問題は賛成か、反対かではなく、どう対処するかだという認識はとても危険です。今回の学習指導要領

の改訂で、小学校英語が、①（もつと低学年からではなく）5、6年生における、②（外国語科という教科ではなく）外国語活動という形に抑えられ、かつ、③ことばの楽しさや奥深さ（とくに、普遍性と多様性）への気づきということが重要な学習項目として取り上げられていることの意味をもつときちんと理解すべきです。案の定、そんな生ぬるい改訂では不十分で、学校における英語の教科化や学習開始時期の早期化が叫ばれ始めています。それが表面化したのが、2008年5月26日に公表された、教育再生懇談会の第一次報告です。学習指導要領が改訂され、まだそれがどのような影響をもたらすかということもまったくわからないうちにこのような報告がなされることには大きな違和感を抱きます。実際、報告が公表された直後、菅正隆教科調査官（当時）がきわめて率直に気持ちを次のように述べています。

様々な分野で活躍する有識者たちの方々に、地に足のついた論議をしていただきたいと思えます。現場を混乱の渦に巻き込むことはなほだ迷惑なことです。まさに、公金を使つての会議。政策に反映されないような会議では、再生懇談会自体を再生する必要が出てくるかも知れません。様々な意見に耳を傾け、子どもたちのために教育を改善する旗振りになっていただきたいと思えます。（菅正隆「英語教育ここだけの話 第5回 再生懇談会を再生する」『英語教育』2008年8月号、47ページ）

最近では、英語教育関係の集會に参加すると、例外なく、実践の場では外国語活動導入への

もありがとうございます。

大津由紀雄

2009年4月

三田にて

追記

右の文章を書き終えた後、2009（平成21）年度から2013（平成25）年度にわたる新事業「英語教育改革総合プラン」が文部科学省初等中等教育局国際教育課を主管課とする形で起ち上げられたことを知りました。その事業目的は次のとおりです。

経済・社会のグローバル化が進展する中、子ども達が21世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であり、このことは、子ども達の将来のためにも、我が国の一層の発展のためにも非常に重要な課題となっている。

このため、教育振興基本計画において「小学校段階における外国語活動を含めた外国語教育の充実」

を目指す学習指導要領の着実な実施を盛り込んでおり、特に小学校の外国語活動の円滑的な実施に向けた条件整備を重点的に実施する。また、外国語に関する能力の測定法の開発や外国語教育の低年齢化、授業時数増、小中連携のあり方に関する調査研究など英語教育の充実に資する施策を総合的に実施する。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/hyokka/keka/08100105/022.htm)

この事業内容の中には、「日本人の英語能力の測定法の研究・開発」なども含まれているのですが、肝心な学校英語教育の目的についての議論の必要性についての認識はまったく感じられません。事実、「事業に至る経緯・今までの実績」を読むと、「戦略構想」の精神をそのまま引き継いだものであることがわかります。

このような流れの中で、この本の提起する問題の重要性が一層増したことは間違いありません。

目次

はじめに 3

I 学校英語教育の現状と課題

「戦略構想」、「小学校英語」、「TOEIC」

——あるいは、ここが正念場の英語教育

学校英語教育とは何か

日本の英語教育界に学問の良識を取り戻せ

学校英語教育の見通し

——言語コミュニケーション論・複言語主義・コミュニケーション論

日本人は英語が使えなければならぬのか？

——「英語信仰」からの脱却と「日本語本位の教育」の確立

II 英語教育を取り巻く社会の力学

主権「財界」から主権「在民」の外国語教育政策へ

江利川春雄

136

「戦略構想」への2つの懸念

三浦 孝

156

III 新しい言語教育へのアプローチ

もっと豊かな言語教育を

古石篤子

164

言語教育の全体像を探る試み

——4つの技能、3つの指導内容、2つの能力

末岡敏明

192

〈教育実践報告〉子どもの立場で「言語教育」を

——先生！ことばのふしぎをもっと知りたいな

齋藤菊枝

210

IV ささまざまな視点から見た言語教育

言語リテラシー教育の政策とイデオロギー

佐藤 学

240

複言語主義における言語意識教育

——イギリスの言語意識運動の新たな可能性

福田浩子

278

仮想「小学校英語覆面座談会」

——反対派も賛成派も本音で語る小学校英語

菅 正隆

302

資料

i